

米国における 社会科教育

ソーシャル・スタディズ

黒田成子

わが国ではいわゆる「社会」の指導書も出ようとしている今日、いまさら米国の Social studies をとりあげるまでもあるまいが、報告書のようなつもりで書いてもよいとのことで、いささか田聞のレポートではあるがこの機会にまとめてみることにした。

まず米国の Social studies (以下かりに社会科とよぶ)とは何であるか。日本の六領域の中でとりあげられている「社会」は集団生活における協調および自主・自律の訓練と社会機能に関する面であるが、米国の社会科というのはわれわれの「社会」よりもはるかに広い解釈がなされている。

この解釈の仕方が各州によって異なるが、カリフォルニア、オハイオ、ウィスコンシンなどいくつかの州から出されている定義を綜合してみるとつぎのような一致点がみられる。

社会科とは人間と、人間をとりまく社会的、物的環境との相互関係であり、また人間同志の関係を扱う研究である。

社会的環境といえば、人間の創り出した生活習慣ばかりでなく、法律、芸術、宗教、貿易、経済、文化、伝統など人間社会全体を含めて考えられるのである。また、物的環境とはすべての動植物、鉱産物、気候、空気、地球、宇宙などを含むものである。

これらの環境は静止しておらず、たえず変展しつつあるものであるが、こうした環境の中で人間がどのように生活し働いていくかというそのプロセスに脚光をあてるのが社会科である。こうなると幼稚園や小学校の社会科といってもその複数の名称が示しているとおり、四年に一つの分野の研究にとどまるだけでなく歴史、地理、政治経済、人類学、社会学、自然科学、芸術の分野にも関係して行く。これらの学問は生きた人間の生活とのかかわりにおいて随時社会科の研究にも必要となるわけである。

次に社会科にちなんだいくつかのことをとりあげてみたい。

Social science も人間関係の問題を扱っているが、これは社会学的分野として研究するものである。おなじ人間関係の問題を扱うにしても社会科では Social science の一部を生徒指導の目的のためにカリキュラムの一領域としてとりあげるものである。

Social education 一これはしほしは社会科と同義語につかわれるが、社会的発達に寄与するすべての学校活動を含むものである

Social learning は Social education より広く、学校といわず社会的発達に関係するすべての経験の事をいう

理想的な社会的態度や概念は単に社会科の教室だけでなく、運動場においても町においても、子どもが人とかわるすべての経験からおこる。社会科は単に知識を与えることか目的ではなく、子どもの個人的発展に尽すことが重要であるのは言うまでもないことである。

米国の社会科の大きな特長は民主社会におけるよき市民の形成ということにある。小学校や幼稚園においても毎朝国旗に対する敬礼がある。日の丸の国旗と少し遠くにいる日本の子どもたちと比較して複雑な気持ちをしてくる。

次に社会科が全体の教育目的にどのように貢献しているかについて考えてみたい。T. Mitchell によると自己実現、対人関係、能率増進、市民教育と四つの点をあげている。

1. 自己実現

社会科というとかく集団の面だけが必要以上に重要視されるが、ここでは集団の中の一単位としての自己の大切さをとりあげ、自己の確立、自己実現ということがまず根本とされている。

言語や数の能力、グループ行動の技術も、集団の中で個人が成長発達することにおいて意義づけ、その他観察、構成、演劇、発表、

評価などすべて集団の発達に共にひとりとひとりを充足せようとしている。

もちろん自律、協調、責任感という点も考慮されている。また、健康については各個人の健康と共に集団生活における保健の問題を重くみている。

2. 対人関係

交友関係、友情、協調、礼儀正しさが重要とされ、またとくに他人や他人種、他の国家に対する尊重とか共感的な感情を養う活動が行なわれる。たとえばお家ごころのような單元においても家族の中のそれぞれの役割について経験させたり、家庭というものに対する意義を知り認識を深める。共同活動、ことによってグループ意識を高め、教室の暖い雰囲気はよい対人関係をまたらすものになる。考えられる。

3. 能率の増進

社会科の教育により好ましい態度や理解力、よい技術が与えられ、それかひいては物を扱ううえに能率増進をたらせると考えられている。まず能率的な仕事のやり方や勉強の方法を身につけさせ、これを習慣つけていく。またいろいろの仕事の役割のあつことをしらせ、そのようにして責任を担うようか指導される。

さらに地域社会に貢献する働き人についての学び、その仕事ごころくみながら、子どもたちは消費生活者としての知識と問題を与えられていく。こうした経験を通して将来家庭や学校、地域社会におけ

る有力な社会人が育てられていくのである。

4. 市民としての責任

グループの責任ある一員としてグループの目標到達に参与することはひいてはよき市民となるための根本的な態度が養われていくことになる。そしてグループの中にあつてたとえ意見の相違があつても相手の問題やニートを知り、互に助け合つていくことの訓練がなされていく。また地域社会や国家祭日の行事にたずさわらせ国民意識を高める経験をもたせ、さらに国の憲法や法律に対する関心と尊敬を養ふ。

このように社会科の目標は米国における教育目標と合致して民主社会におけるよき市民の育成に重点がおかれている。

各州では社会科の目的をいくつか掲げ、いずれも民主的社會人の育成を強調した十項目から二十項目にわたる相当長文のものが多く、米国では公教育の中にいっき宗教を持ちこまないたてまえになつている。しかし多くの社会科の目的に眼を通してみるとそこにはわずかに二百年の伝統ではあるが、ヨーロッパの宗教思想を背景とし、これに加えて建国の精神が脈々と流れていることに気がつく。人と人の和合を説き、自然の美をしらせ、勇氣と創造性をもつて開拓に進ましめ、人間に与えられた知識と力を建設的につかひ文明の発展に貢献する人材を育成しようとしている。その成果はともかくとして、目的や目標を重要と考えそれに相当の力をそそぐやり方には示唆されるところがある。こうした目的のあとに行動による具体

目標が続いて記されているのが普通である。しかしそれ以上展開をこまかくすることになると、全く十人十色で日本の教師たちのように克明な指導計画を毎週や毎日書いたりすることは比較的少ない。

次に社会科の内容についてであるが州とそれぞれの学校によつて相異があるが、幼稚園と小学校低学年は高学年より共通性が多い。

a 幼稚園および小学校一年

家庭、学校、地域社会と働き人、行事、祭日、飼育物、旅行、ままこと、共同作業、健康と安全、牧場、動物園、サーカス、お店、のりもの、玩具屋、ガソリン、スタンプ、通信 など

b 小学校二年

地域社会と働き人、私たちの町、郵便局、図書館、消防署、汽車、トラック、飛行機、パン屋、牧場、きもの、家、住居、厚生と安全、祭日や行事、交通、通信、遊び、動物 など

c 小学校三年

地域社会、遊び、教育、船舶、衣、食、住、偉人、祭日、お百姓さん、季節、インテリゲン、米国の開拓者、海外の子ども など

d 小学校四、五、六年

外国について、宗教、交通、通信、産業、職業、衣、食、住、インテリゲン、開拓者、偉人、宇宙時代、時事問題、

ヨーロッパ、アメリカの歴史、地理、気候、公民、デモクラシーの成長、憲法、地域社会 など

幼児や低学年では近辺の環境に関したものが多くが高学年になると公民、米国の歴史、憲法、州の歴史、州の憲法などを何単位履修させること、あるいは祝祭日の指定（リンカーンやワシントンの誕生日、植樹祭）などが法的に指示されている。従来社会科ではインディアンや米国の初代文化に関する勉強がさかんであったが、昨今はこうした面を内容として扱うことが少なくなった。むしろ自分の住んでいる町や州の問題、宇宙時代、ラテン、アメリカ、国連や世界の問題、毎日の生活に科学性がどう働きかけるかなど子どもをとりまく生きた問題が興味を中心としてとりあげられている。ソ連に對抗する意味ばかりでもないが、宇宙科学時代になってきているので自然科学の基礎訓練が強調されている。

さて最後になってしまったが幼稚園ではどのような社会科の学習が行なわれているか少しふれてみたいと思う。

米国の幼稚園といえば小学校へ入学する一か年前の年長児を必ずやるものでほとんどが公立小学校の附属であることは周知の事実である。これらの幼稚園も保育方法は種々であるが、一般に見られることはいわゆる全員が集合する朝の十五分ほどの時間以外は解体した形態がとられ、形式ばらない保育がゆるやかなテンポで流れている感じがする。

いろいろの家具や道具がおかれ、子どものリビング・ルームとい

った感じのホールのような広い保育室、しかも二十五名前後の人員では気分もおだやかに保つことができるだろう。保育室の一隅ではおままごとがくりひろげられ、他の一隅には亀を興味深そうに観察している。大きな積木で高層建築のテパートを構成している男児もあれば、木工で船を作っている者もいる。

子どもの興味を重んじるためにいろいろの興味が併行してとりあけられ、しかもグループの大きさが小さいことが特長である。

こうした中で教師はアドヴァイザーとして全体をみてまわる。子どもが亀のうちを作ると「えは話し合いによって」「土」が必要なことに気づかせる。汽船の煙突について言い合いが始まると写真や簡単なスライドを見せたり、ヒントを与える。行事など父兄を招待して見せることは全く稀である。建園に尽したワシントンの誕生日にみんなでケーキをたべる。ナフキンは皆でつくったのしむ。あくまで子ども本位である。ハスをつらねて全員が父兄同伴で遠足に出かけるようなことはあまりなく、附近の町の工場とかパン屋などへ気軽に出かけて社会科の見聞を広めている。日本においては米国のような困難な人種問題もなく、国家社会の構造も違うし市民教育ということはあるよりあげられていないが、将来の日本を荷う子どもたちの教育を考えるに当り、人間像の問題と関連して従来「社公」が充分再検討されることを願っている。

（東洋英和短期大学）